

閉会挨拶

宮崎 恒二

日本マレーシア学会会長／
東京外国語大学



皆様、今日は特別シンポジウム「東方政策(ルックイースト政策)の30年と今後の課題の展望」にご参加くださり、有難うございます。東方政策が30年を経て、その成立の背景、それを取り巻く環境の変化、そして今度の意義について、非常に興味深いご発表、ご議論が繰り広げられたことと認識しております。

冒頭の川端さんからの趣旨説明にもありましたように、JAMSはマレーシア研究を主体とする学術団体であり、かつ大学以外の様々なセクターとの連携、とりわけ政策面に関わる連携を特徴としていること、またJAMS自体が東方政策提唱後に設立され、会員の活動も東方政策と何らかの関わりを持ってきたことから、本日のシンポジウムはJAMSならではのものと言えるでしょうし、また会員の皆さんのご関心が高いことも、うなずけることではないかと思います。

熱を帯びた議論が戦わされ、すでに終了時刻を過ぎておりますが、閉会の挨拶という特権の中で、私なりに気づいた点を二、三お伝えしたいと思います。

■ マレーシア国内政治のなかで

東方政策がどのような役割を果たしたか

まず、東方政策の成り立ちです。マハティールというカリスマ指導者が主導した政策であり、それに日本がどう反応し、今後、その資産をどのようにセカンド・ウェーブにつなげるかという点は、重要な論点です。

しかし、より多角的に東方政策を見るとすれば、植民地主義の脱却や労働意欲、倫理観といった本日も議論となった点に加え、マレーシア国内の政治状況の中で、東方政策がどのような役割を果たしたか、あるいはどのような役割を期待されていたか、是非知りたい点です。アジア的価値というお話ともつながるかも知れませんが、提唱された当時の、またそれ以降のマレーシア国内政治の場で、どのように扱われたのか、あるいは人材養成と外交という領域のみをターゲットにしていたのか、という点が関心を惹きます。

■ 経済発展モデル、高等教育と人材育成

——政策を取り巻く環境の変化

第二に、すでに複数の観点からご指摘がありました。この30年で東方政策を取り巻く環境は大きく変化しました。日本側で意識していたような、経済発展モデルとしての日本という位置づけは薄くなり、日本が牽引する雁行型の経済発展ではなく、むしろイコール・パートナー間の協力関係に変化しつつあります。

また、人材養成の面でも、日本の教育に対する評価は相当に変化していることは確かです。とりわけ高等教育の質という問題は、大学関係者の共通の課題であり、かつ難題でもあります。かつて日本の経営モデルがもてはやされた時代もありましたが、今は逆に阻害要因であるとの見方もあります。教育についても同様です。ここ数年、グローバル人材の育成というスローガンが大きく叫ばれていることは、皆さんご存じだと思います。これまでの高等教育では、国境をまたいで活躍できる、また与えられた課題をこなすだけでなく、自ら問題を設定できる人材を生むことを、これまでの日本の大学では体系的・組織的に考えてこなかった、と考えられるようになっていきます。

■ 双方向的な交流の拡大と体系化に

東方政策の将来があり、JAMSの役割がある

この点と関連して、第三点として、東方政策の当初の狙いであった人材養成の可能性について、本日の議論の中で触れられたことを強調しておきたいと思います。ルック・マレーシアという表現が用いられましたが、日本にないものをマレーシアから学ぶ、あるいはマレーシアとの交流から得るといった発想が生まれていることは注目すべきです。討論の中でも触れられましたが、多民族国家としてのマレーシアにおけるダイバーシティ・マネジメントは、それが理想的であるかどうかは別問題として、同様の問題に直面しつつある日本にとって、大いに参考になると思われますし、また、退職後の海外移住先としてマレーシアに人気が集まっていることも、生活の質を再考する際の参考になるでしょう。

現在、日本の多くの大学では、「グローバル人材」を育てるために、日本人学生を短期間、海外に送り出す動きを強めています。英語の通じるマレーシアは、おそらく人気のある留学先の一つになると思われます。そのような送り出しのプログラムには、海外に赴く日本人学生が、日本のことを海外で教える、あるいは日本のことについて話すといった要素を組み込んでいるも

のもあります。このような交流の機会を双方向的に進めることで、相互の関心も深まると考えられます。

さきほど「通訳」に関する議論がありましたが、双方の文化・社会に通じた人材が存在してこそ、このような交流プログラムが効率的に組み立てられるのではないのでしょうか。双方向的な交流の拡大とその体系化、そこに東方政策の一つの将来があるでしょうし、またJAMSの果たしうる大きな役割があるのではないのでしょうか。

閉会にあたり、本日のスピーカーの皆様、とりわけ外務省の山本課長には、お忙しい中、貴重なご報告、ご意見をいただいたことに厚く御礼申し上げます。コメンテーターの方々、またご参加いただきました皆様方、有難うございました。最後になりましたが、会場を提供し、大会の運営に当たっていただいた舩谷さんをはじめとする立教大学の皆様方に深く感謝し、閉会の辞とさせていただきます。